

〈調査報告〉

マダガスカルにおけるイスラム教 十二イマームシーア派コージャの過去と現在[※]

藍 澤 光 晴

目 次

I はじめに	IV グジャラートとの関係の変化
——先行研究および調査目的と対象——	——存在の特殊性——
II 東アフリカ経済圏とマダガスカル	V むすびにかえて
——移住への足がかり——	——永遠の被害者 Victime Eternelle——
III グジャラートからの移住の本格化	
——1880年代以降——	

I はじめに——先行研究および調査目的と対象

マダガスカルには、カラナ Karana, バニアン Banian と呼ばれているインド系マダガスカル人が約2万人から4万人ほど存在しており、マダガスカル全人口の約0.2%を占めることになる。カラナとはインド系イスラム教徒を指し、バニアンとはインド系ヒンドゥー教徒を指している(図1)。カラナ、バニアンともに多くは自営業者で、おもに自動車部品販売店、家電製品販売店、貴金属商やホテルなどを営んでおり、マダガスカルのなかで富裕層を形成している。その経済規模はマダガスカル GDP の15%を占めるとまでいわれ¹⁾、マダガスカル経済への影響は小さくはない²⁾。

インド系マダガスカル人の経済活動を把握するには、とくに19～20世紀の東部アフリカ沿岸地域におけるインド商人の活動の歴史を射程に入れなければならない。しかし、南アフリカやザンジバルにおけるインド商人についての研究³⁾に比べ、マダガスカルのインド商人についての研究業績は、圧倒的に少ない⁴⁾。さらに数少ない一部の研究者による先行研究は、以下のような点で

※ 本研究に対し龍谷大学経済学研究科よりフィールド調査補助費(2007年度)の給付を受けた。ここに記してお礼申し上げる。なお本研究は2007年度国立民族博物館共同利用研究員としての研究業績の一部である。

1) Razafimandimamby 1999: 25-33.

2) マダガスカルを代表する大企業 la Société BARDAY, 首都アンタナナリヴ Antananarivo のアナナケリー Ananakely 地区やツァララナ Tsaralalana 地区などの多くの商店はコージャの経営である。

3) 富永 1986; 1987. Sheriff 1995. Allen 1981. 大石 2003.

4) イギリスの植民地が大多数を占めていた環インド洋東アフリカ地域でマダガスカルがフランスの植民地であったという事実が関係しているように思われる。とくに日本におけるインド系移民の研究は、大英帝国内での労働力移動という現象から把握しようとする傾向が強い(大石 1999; 古賀他編 2000)。したがってこのような従来のアプローチが、環インド洋東アフリカ地域で横断的に活躍していたグノ

十分ではない。ブランシー⁵⁾は、マダガスカルのインド系移民の人類学的諸要素 *Éléments d'Anthropologie* については総合的に分析したが、19～20世紀の東部アフリカ沿岸地域経済圏のなかでインド商人が果たした役割について明確には考察していない。一方シャンベル⁶⁾もまた、18～19世紀末のマダガスカル経済史についての体系的な研究を通してインド商人の経済活動の重要性について指摘はしたが、インド商人の経済活動をマダガスカルという「枠組み」を超える現象としては把握していない。

そこで、本調査の目的の第一は、これらの従来の研究では断片的にしか報告されていないインド商人の移住を、環インド洋という広範な地域のなかで中心的な役割を担ってきた十二イマームシーア派コージャ Khoja Shia Ithana-Asheri（以下コージャ）への聞き取り調査を通して再構築⁷⁾し、植民地主義が色濃く反映されている従来の国民国家の枠組みでは汲み尽くされえない現象を把握することにある。

(1) 調査の目的、手法、結果

2007年7月30日から9月28日まで、マダガスカルの首都アンタナナリヴ Antananarivo と西海岸の都市チュレアル Tuléar で調査を実施した。今回の調査の目的は、従来の研究では不十分であった19～20世紀の東部アフリカ沿岸地域で活躍していたコージャの移住の歴史を明らかにするために、教団関係者および商店主約30名⁸⁾（「資料—面談者リスト」参照）に対し、インタビュー調査を試みた。インタビューに際しては、家族に伝えられている移住の歴史を中心に、聞き取りを行なった。

調査の結果、従来の研究では明確にされていなかったコージャのマダガスカルへの移住の目的が明らかになった。19世紀後半まで環インド洋東アフリカ地域においてマダガスカル北西部海岸地方はザンジバルの商業拠点の一つであり、コージャの初期の移住も商業の拠点 *Comptoir*⁹⁾ を築くためにザンジバルから移動したこと、さらに19世紀後半からはグジャラートからの本格的な

グジャラート商人の研究を困難にしているように思われる。しかし植民地支配の影響を受けて、環インド洋東アフリカ地域におけるグジャラート商人の経済活動を十分に把握できないとなれば、いまだにわれわれが、植民地体制が築いたディシプリンに縛られていることになるだろう。

5) Blanchy 1995.

6) Champbell 2005.

7) 坂井（坂井 2003）は、西アフリカのイスラム商業ネットワークの解明に際し、口頭伝承の重要性を主張し、とくに長期の歴史や広範な商業ネットワークの解明のためには口頭伝承を歴史学研究に組み入れるべきだと説いている。

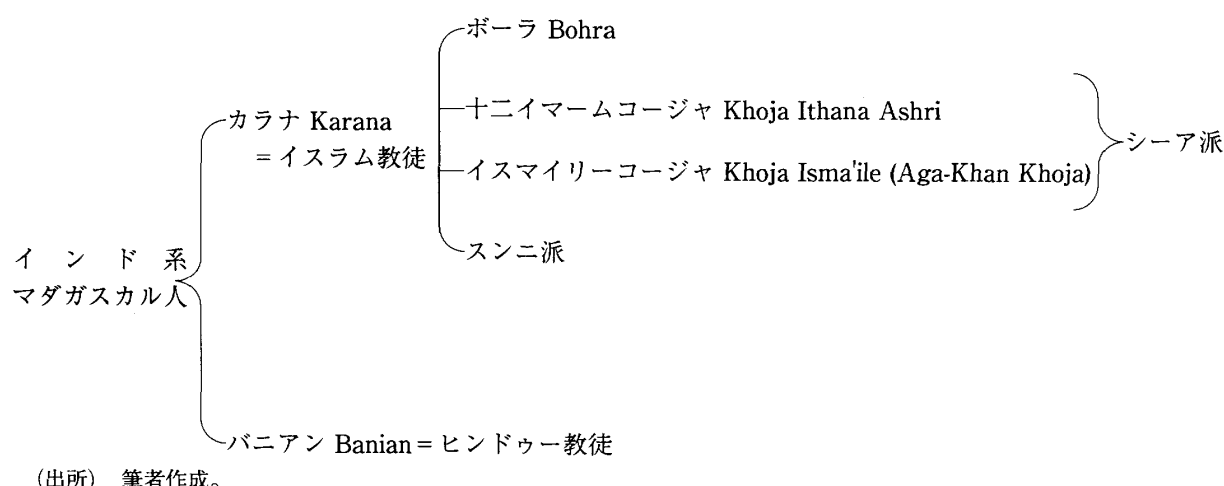
8) 面談者は、アンタナナリヴ・ジャマートの代表者であるアニール・デュマ氏 Anil Djouma に今回の調査の目的を話し、彼から紹介された人々である。ジャマートとは教団の地域支部のことである（後述参照）。またチュレアル在住の面談者は la Siciété Barday の会長であるアスガル・バルダイ氏 Asgar Barday の紹介である。

9) *Comptoir* とはフランス語で、①バー、銀行、空港のカウンター、レジや売り場 ②海外商館ないし倉庫 ③レジ係 ④支店ないし出張所という意味がある。現在でもマダガスカルのコージャ経営の商店の看板に“*Comptoir*”の文字を見受けることがある。そこで本稿では“商館（倉庫）でのカウンター業務係”と訳すことにした。

資料一面談者リスト

氏 名	性別	年齢	職 業	備 考
Nilam Noormohamed	女	50代	Plix Choc 店主	子供用玩具などの販売（独立大通り）
Shenaz	女	50代	Faneva 店主	子供用玩具などの卸と小売（ツァララナ）
Anil Djouma	男	50代	MADALUX 店主	カーステレオ小売（独立大通り）。アンタナナリヴジャ マート代表
Sheikh Younous	男	20代	僧侶	
Sheikh Momin	男	60代	僧侶	イスラム学院代表。マダガスカル十二イマーム派最高指 導者
Houssein Ali	男	50代	Taj Mahal レストラン店主	インド料理レストラン（ツァララナ）
Asgar Barday	男	70代	BARDAY 会長	本社ビルはツァララナにあり
GouleRose Djiva Pirbay	女	50代	マドラサ教師	アンクルンダンヌのモスクの裏にマドラサあり
Abid Houssein Mamoday Ismael	男	50代		GouleRose Djiva Pirbay の夫
Mohamed Raza Kamis	男	50代	マドラサ校長	
Roshan Jamil	男	70代	イスラム学院事務局長	
Azim Darmsy	男	20代	FUTURAMA 店主	家電輸入、卸（ツァララナ）
Darmsy Ladha Mamedaly Piarraly	男	50代	Luna 店主	家電小売（独立大通り）
Roshanaly Molou	男	80代	もと店主	ケンカイヤリー Maison Molou（ツァララナ）店主の父
Minaz Molou	女	40代	マドラサ事務局員	
Imram Ilias fidahoussen Amarsy	男	20代	大学生	Minaz Molou の息子
Naveroze Ali Sondarjee	男	50代	Aigle D'or チュレアル 店長	la Société BARDAY 経営の全国展開の靴販売店
Mamod Naverosaly	男	20代	セレクトショップ店長	Naveroze の息子（チュレアル）。セレクトショップ経営
Farah-Naz	女	20代	セレクトショップ従業員	Mamod Naverosaly の妻
Ashik Alimamode	男	70代	DISCOMEX 社長	輸出業（チュレアル）。元チュレアルジャマートの 代表者
Roshanaly Vally	男	60代	Maison Roval 店主	文房具卸、小売（ツァララナ）、le Président de Con- seil Supérieur Socio-Cultural Islamique à Madagascar
Maitre Mourtouza	男	40代	FM. RVS 職員	いわゆるマダガスカル人。FM ラジオの Le Directure du Plan
Soukaina Riaz	女	20代	コージャ地域評議会事務員	Conseil Régional des Khojas（ツァララナ）
P. Hassam Arzou Raza	男	40代	General Import 店主	インド商品の輸入販売（ツァララナ）
Salim Issoufaly Katchera	男	40代	General Import 従業員	
Mahomed Raja H. Alibay	男	50代	MOD 店主	ケンカイヤリー（アンクルンダンヌ）
Anissa Khatoune	女	60代	Epice de l'inde 店主	インド食材販売（ツァララナ）。Roshanaly Vally の妻
Zahir Raza	男	30代	BALI CAMERA 店主	イギリスブランド既製服販売（独立大通り）
Mohamed Amine Haidaraly	男	30代	BALI CAMERA 従業員	
Hassim Hossen Haidaraly	男	40代	Mohamed Amine Haidara- ly の兄	
Molou Navazaly Rossanaly	男	50代	Maison Molou 経営者	ケンカイヤリー問屋（ツァララナ）

図1 インド系マダガスカル人の構成



移住であったことが判明した。

(2) 調査地の概要

調査地のマダガスカル共和国 Repoblikan'i Madagasikara は日本の約1.6倍の広さからなる島国であり、アフリカ大陸からモザンビーク海峡を挟んで約400 kmのインド洋南東部に位置している。首都は中央高地のアンタナナリヴ Antananarivo である。人口は、2006年現在1,910万人で、マレー系、アフリカ大陸系の約18民族からなる。国民総所得 GNI は、世界銀行によると2006年度は53億米ドル、一人当たりに換算すると280米ドルである。主要産業は米、コーヒー、バニラ、砂糖、丁子、牛などの農牧業とエビやまぐろなどの漁業である。貿易に関しては2005年度現在、輸出総額は834百万米ドル、輸入総額は1,427百万米ドルの輸入超過となっている。主要貿易品目は織物、バニラ、甲殻類の輸出品と機械、消費財、燃料などの輸入品であり、主要貿易相手国はフランス、モーリシャス、ドイツ、イラン、アメリカ合衆国などである¹⁰⁾。

マダガスカル北西部は、15世紀にヨーロッパ列強が東アフリカに侵入する以前より、各種のインド製品や中国陶磁器の輸入により繁栄していた¹¹⁾。その後1500年ポルトガルがマダガスカルを「発見」したが、ヨーロッパ列強はマダガスカルを実効支配しなかった。1642年フランスの宰相リシュリューはマダガスカルの植民地建設を「東洋会社」に委ねるが、しかしフランスは先住民との軋轢と衝突で1674年にマダガスカルから撤退せざるを得なかった。その後19世紀までヨーロッパによる植民地争奪が本格化することはなかった¹²⁾。しかしながら結局、1895年フランスーイメリナ王国戦争終結の翌年1896年8月、フランスは併合法によりマダガスカルの植民地支配体制は確立した。1947年大規模な反フランスの激しい武装蜂起などを経て、1960年「マダガスカル共和国」として独立し（第一次共和政）、1975年社会主義へ政策を転換した（第二次共和政）。し

10) 外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/madagascar/data.html> より。

11) エスアベルマンドルウス 1992: 866-891。

12) マダガスカルの植民地支配前史に関しては（森山 2006: 6-20）を参照のこと。

かし1980年代社会主義経済の行詰りが明るみになるにつれ、政府に対する不満が勃発した。やがて1991年に起きた大規模な反政府運動により、1993年再び国名を「マダガスカル共和国」とし第三次共和政へと移行し、現在に至っている。2002年の政変から現大統領のマーク・ラヴァルマナナ Marc Ravalomanana がマダガスカル共和国を率いて、経済の自由化を推進している。

(3) 調査対象について——コージャ Khoja はシーア派の分派 firaq なのか——

コージャは、もともとロハナ Lohana¹³⁾ というジャーティ Jati¹⁴⁾ に属しており¹⁵⁾、ヒンドゥー教徒からイスラム教徒へ改宗した人々を指している¹⁶⁾。ロハナ・ジャーティはグジャラート地方の“商館（倉庫）でのカウンター業務係 Comptoir”の職業集団のことである¹⁷⁾。しかし日本ではコージャに対する認識が誤謬を持って語られていることは、否定できない。たとえば、岩波書店版『イスラーム辞典』（2002年）ではコージャはシーア派の分派 firaq であるかのように紹介されている¹⁸⁾。同様に中村も「ニザール派はハサン・サッバーフをダーイ（宣教者）としてセルジューク朝や十字軍と激烈な闘争を展開していたため、西洋ではアサシン伝説に基づく暗殺団として知られている。しかし、1256年のモンゴル軍の侵攻によって次々と拠点を奪われ、インドに逃れる。またムスターリー派はファーティマ朝の滅亡後は、幾つかの分裂をへて今日に至っている。両者はそれぞれ今日、ボホラー派、ホジャ派¹⁹⁾と呼ばれてインド・パキスタンに残っている」²⁰⁾とあり、誤解を与える記述となっている。コージャには本稿で取り上げる十二イマームシーア派 Shia Ithana-Asheri、イスマイル派 Isma'ili その他スンナ派 Sunni のコージャも含まれている。したがってコージャとはイスラム教シーア派の分派 firaq ではなく、グジャラートのジャーティの一つであるロハナのヒンドゥー教徒からイスラム教徒への改宗者を指し

13) 篠田（篠田 1994：201-232）によるとロハナは、グジャラートにある100近くのジャーティ（職業集団）の一つで、パンジャブの地名ローハンプル／ローホークト Lohanpur/Lohokat に由来し、インド内外の交易センターで活躍する商人を指している。

14) カーストとはインドでは通常ジャーティと呼ばれており、「インド社会において、種族、職業、地域等にそれぞれ限定された集団であって、集団に所属する人びとは、あるいは同一の祖先に由来するという信念をもち、あるいは一定の伝統的、世襲的職業に従事して同種社会を構成し、各カースト間は互いに排他的、敵対的関係をもつ」（平凡社版『アジア歴史辞典第2巻（1959年）』p. 171）。しかし最近のカーストに関する研究では、上記のように固定化されたものではなく、近代以前のジャーティは柔軟性に富むものであったという議論がある。すなわちイギリスによる植民地支配を容易にするために強調され、内面化され固定化されたといわれている（関根 1997：307-347）。本稿ではカースト制度について議論するものではないのでこれ以上の考察は避けるが、いずれにせよロハナのジャーティがコージャの自画像のあり方に大きな影響を与えていることには違いない。

15) Rizivi and King 1973：12.

16) ペアスン 1984：43-44。

17) モロウ・ナヴローズ・ロッサナリー氏 Molou Navazaly Rossanally との議論による。

18) 同辞典のコージャについての項目で、コージャ派は「シーア派の一分派」（p. 892）であると記述されており、さらに分派についての解説に付随している図でもコージャはシーア派の分派 firaq の一つとして紹介されている。

19) 通常“コージャ”とグジャラート語では発音されている。

20) 中村 1998：153-154。

ている²¹⁾。しかし、マダガスカルにおいてコージャといえは、原則として十二イマームシーア派のことを指している。イスマイル派のコージャは、イスマイル派 Isma'ili もしくはアーガー・ハーン派 Aga-Khanist と呼ばれている。

19世紀前半まで、コージャは、シーア派のなかでもイスマイル派 Isma'il に属する人々のみであった。このことは、コージャがシーア派第6代イマームジャアファル Jaffar Al Sadiq の長男イスマイル Isma'il を第7代イマームとして支持したということである(図2)。しかしイスマイル派もやがて10世紀になると第8代カリフの後継者争いをめぐってニザール派 Nizari とムスタアリー派 Mustali に分裂した。ニザール派は、12世紀になるとグジャラートを中心にインド北西部地域に拡がり、ロハーナ・ジャーティのヒンドゥー教徒の多くが、イスマイル派に改宗した。1840年、ニザール派のアーガー・ハーン Aga-Khan がイランでカージャール朝のモハンマド・シャーに対して反乱の起こし、ケルマーン地方での決起で敗れるとアフガニスタンを経てボンベイへ逃亡してくるという事件が起きた²²⁾。その事件以降、コージャはアーガー・ハーンをイマームとして迎え入れるか、拒否するかをめぐって内部分裂が生じた。最終的にイギリスがアーガー・ハーンをコージャのイマームとして正統であると認めたことによって、アーガー・ハーンをイマームとするイスマイル派と「それ以外」に分裂した。「それ以外」のコージャの多くが十二イマームシーア派へと改宗した²³⁾。グジャラートやボンベイでの分裂に伴いインド以外のマダガスカル、ザンジバルやオマーンで活躍していたコージャも同様に分裂した。

現在コージャは、マダガスカルに約5,500人存在しており、そのうち首都アンタナナリヴ Antananarivo には約2,500人存在しているといわれている。さらにその他の東アフリカ地域、イギリスやフランスなどのヨーロッパ、アラブ首長国連邦などの中東諸国、アメリカやカナダにもコージャは存在しており、世界規模で教団が組織されている。その規模は12,500人程度だといわれている²⁴⁾。現在では世界各地の教団ネットワークは、留学、商品の仕入れや世界中から喜捨さ

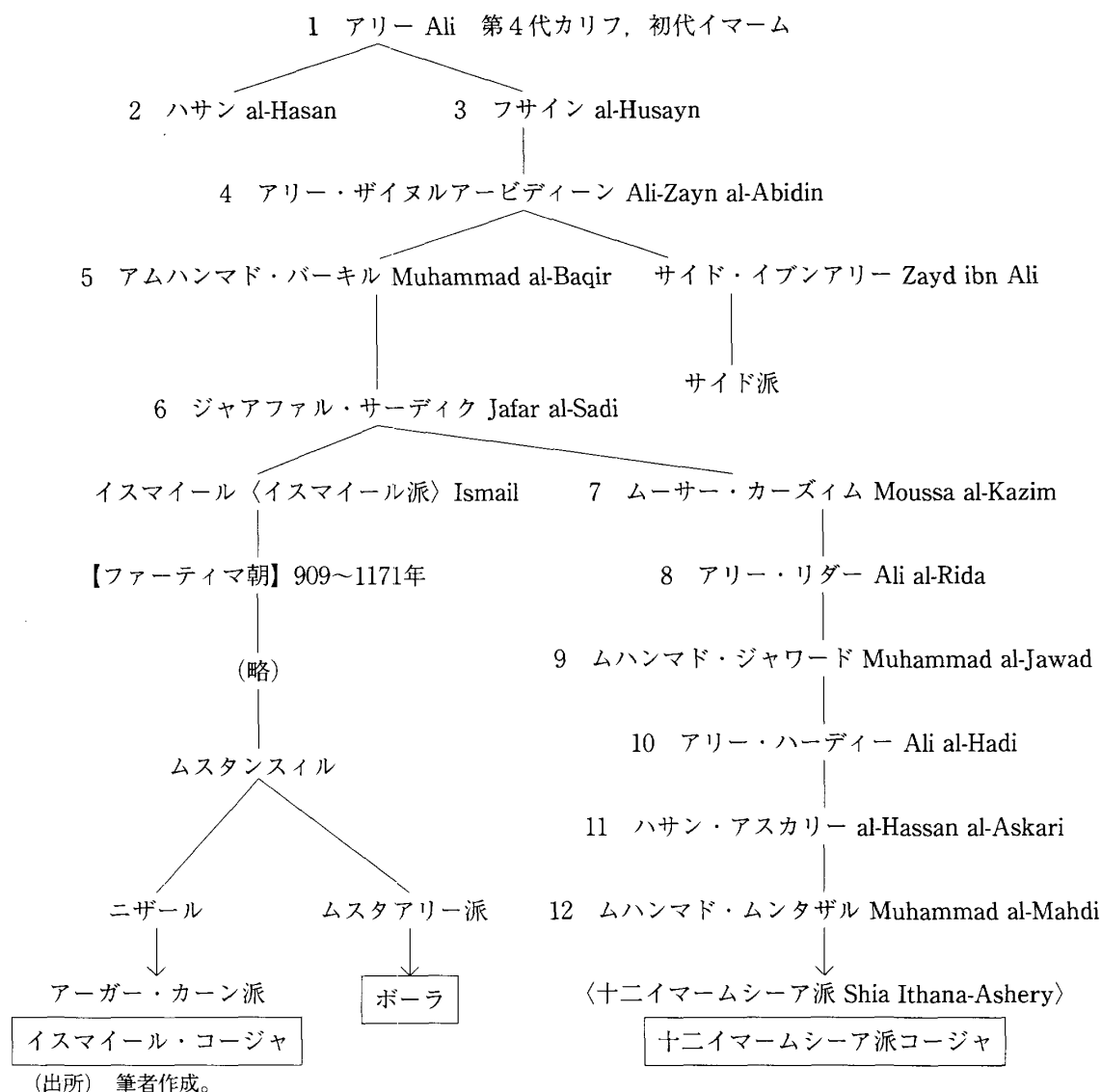
21) ボーラ Bhora の女性二人にコージャとボーラ Bhora の違いはどこにあるのかと質問した答えが以下の通りであった。「コージャとボーラは、“カースト caste” が違う。言葉も若干違うけど。同じ商人だけど、コージャは輸出入業に携わっている。私たちは、小さな商店を持っているだけ。問屋ではなく小さな小売店を経営しているだけ。彼らは私たちと違い大変お金持ちだ。私たちは昔からイスラム教徒で商人の“カースト(ジャーティ)”なのよ。」つまりこの発言にはイスラム教徒にも関わらずジャーティがマダガスカルに移住した現在も彼／彼女たちの自画像のあり方に大きく作用している事実が示唆されている。すなわちコージャやボーラといった概念はジャーティによって規定されていると考えられる。ちなみにボーラの語源は商人を意味するグジャラート語を語源としている(Blanchy 1995: 193), (ペアソン 1984: 43)。

22) タバータバーイー 2007: 77。

23) Hollister 1953: 364-370。

24) モーミン師 Sheikh Momin (2007年9月現在イスラム学院代表者 le Directeur Général de l'Institut Islamique de Madagascar) へのインタビューによるとマダガスカルにはジャマート Jamaat と呼ばれる地方支部が16あり、現在活動中のジャマートは14ジャマートである。これら各ジャマートを統括するコージャ地域評議会 Conseil Régional des Khojas があり、この統括団体の代表者は16ジャマートの各代表者による選挙で3年毎に選ばれる。1961年にコージャ評議会は発足し現在では16代目の代表者によって運営されている。またコージャ地域評議会の上部組織はタンザニアのダルエスサラームにあるノ

図2 シーア派系図



れた献金の再分配などに利用されている²⁵⁾。

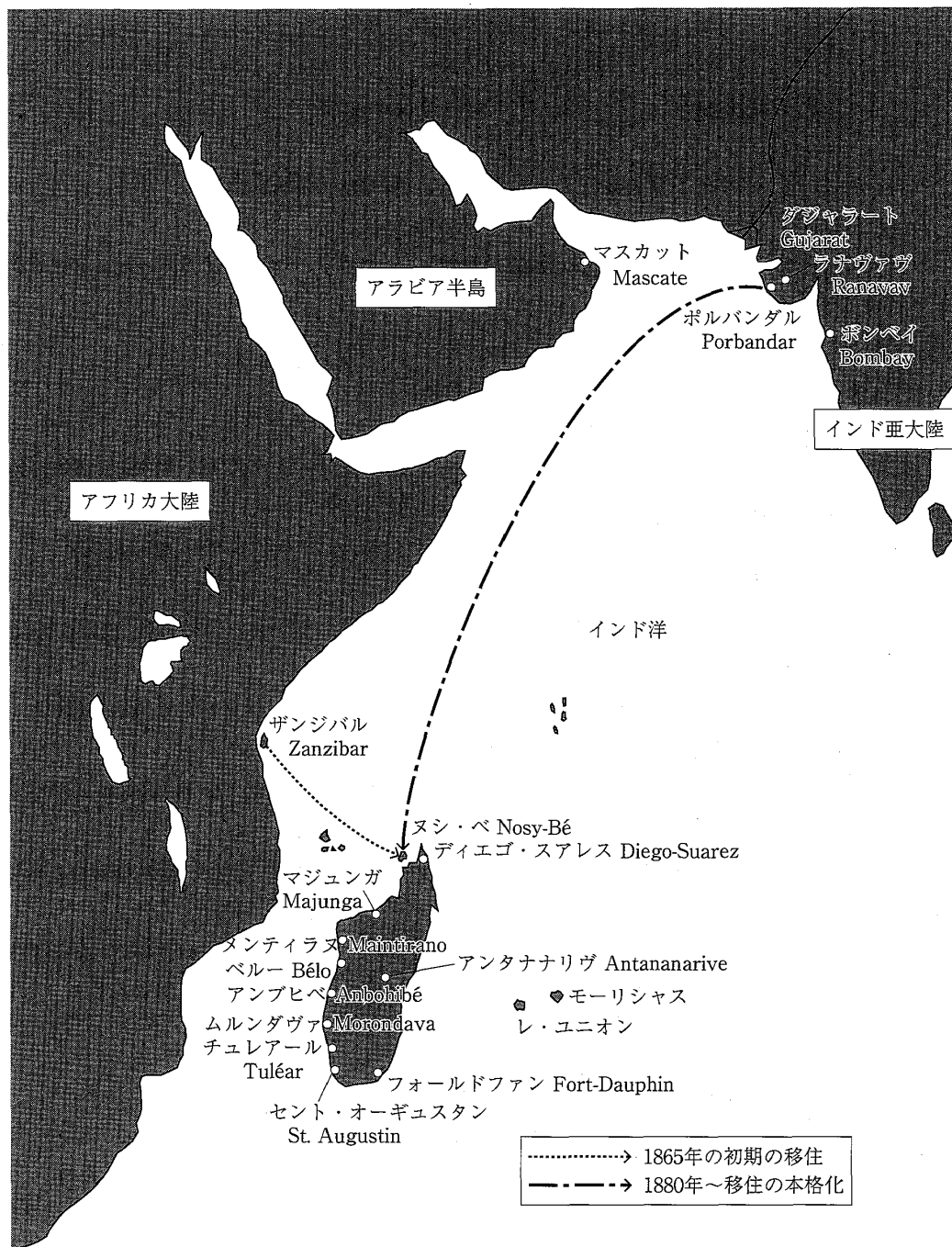
II 東アフリカ経済圏とマダガスカル——移住への足がかり——

マダガスカルへコージャの移住が本格化するのは、19世紀後半になってからである。1820年代後半のブー・サイード朝のオマーン王サイード・ビン・スルターンによるザンジバルへの移動は、

、アフリカ連盟 The Federation of Khoja Shia Ithana-Ashery of Africa であり、さらにアフリカ連盟の上部組織は、世界のコージャ組織を統括する世界連盟 The World Federation of Khoja Shia Ithana-Ashery がイギリスのミドルセックスにある。モーミン師によるとコージャは、かつてイランのホメイニー師を指導者として仰いでいたが、ホメイニー師亡き後の現在はイラクのシーア派の最高指導者であるスィースターニー師を指導者として仰いでいる。

25) マダガスカル首都アンタナナリヴジャマート Jammât d'Antananarivo の代表者アニール・デュマ Anil Djouma 氏へのインタビューによる。

地図



イスラム勢力による東部アフリカ沿岸地域での覇権の確立とインド商人の活躍を大きくクローズアップさせた²⁶⁾。ザンジバルを中心としたオマーン王の東部アフリカ沿岸地域での覇権は、1890年のイギリスによるザンジバルの保護領化まで続くことになるが、サイードの覇権を経済的に支えていたのはおもにヒンドゥー教徒とインドムスリムであった。インドムスリムに関しては「主としてアラブと組んで内陸との交易に介入していった。ホジャ（コージャ）やボホラなどといったインドのムスリム商人が信用と引きかえにアラブから象牙やゴムを入手し、それをバニアンに

26) Beachey 1996: 365; Pearson 1998: 242.

卸す、というパターン」²⁷⁾で東アフリカ経済圏の一端を担った。東アフリカ各地域でインドムスリムは、まさに“商館（倉庫）での会計係 Comptoir”として活躍していたのである。

上記の文脈からマダガスカルにおける彼らの当時の活動も容易に推定できるが、ロッシュン・ジャミール氏 Roshan Jamil²⁸⁾の証言²⁹⁾はさらにそれを裏付けるものである。

1865年ザンジバルからヌシ・ベ Nosy-Bé へ来たシェリフ・ジヴァ・スルティ Sherif Jiva Sourti, モロウ・カンジェー Molou Kanjee, アリバイ・タワール Alibhay Tahwar の3人がマダガスカルに移動した最初のコージャである。とくにアリバイ・タワール Alibhay Tahwar (ザンジバル生まれ)は、ザンジバルで金物やその他商品一般を扱う商人、ケンカイヤリー Quincaillerie³⁰⁾として成功を収めており、さらなる販路拡大のためにマダガスカルに新たな拠点、つまりマダガスカルに“商館（倉庫）”を築くためにやってきた。ザンジバル、インドとマダガスカル間の取引に従事し、ヌシ・ベ Nosy-Bé の他にマジュンガ Majunga, メンティラス Maintirano, スアララ Soalala, ムルンダヴァ Morondava, ベルー Bélo, チュレアール Tuléar に次々とインドやザンジバルから持ってきた商品を卸す商店を設立した。これら商店には彼の親戚をインドやザンジバルから呼び寄せ、派遣した。またアリバイ・タワール Alibhay Tahwar は敬虔な十二イマーム派の信者であり、1870年にヌシ・ベ Nosy-Bé にマダガスカル最初の十二イマームシーア派コージャのモスクを建設した³¹⁾。

1865年ザンジバルからのコージャの移動は、ザンジバル在住者による販路拡大が目的であった。証言にあるように、アリバイ・タワール Alibhay Tahwar は“カウンター”をマダガスカルに築くために移動してきた。それは、コージャがロハーナ Lohana のジャーティであったこと無関係ではない。とくにアリバイ・タワール Alibhay Tahwar は、ザンジバルで貿易商人として経済的な成功を収めており³²⁾、さらなる販路拡大を目指し、マダガスカルに拠点を築くために“港での商館（倉庫）でのカウンター業務係”を配置したことは、不自然なことではなかった。その

27) 富永 1987: 45-46。

28) 2007年9月現在、彼はイスラム学院事務局長 le Secrétaire Général de l'Institut Islamique de Madagascar の要職にあり、マダガスカルで十二イマームシーア派の普及活動に従事している。

29) ブランシー (Blanchy 1995: 100-101) が述べていることとこの証言は異なっている。ブランシーによればシェリフ・ジヴァ・スルティ Sherif Jiva Sourti, モロウ・カンジェー Molou Kanjee は、バッチョー・ハッサン Batchoo Hassam とともに1885年もしくは1890年頃にアンティラナナ Antsiranana (Diego-Suarez) に来たとなっている。証言をもとに記述しているが、誰の証言であるかは記載されていない。

30) ケンカイヤリー Quincaillerie は一般的に金物屋と訳されるが、マダガスカルにおいては金物のほかに日常生活品一般 Marchandise Générale を扱う商店のことを指している。日本ではホームセンターがケンカイヤリー Quincaillerie に最も近い。

31) 本証言は、ロッシュン・ジャミール氏 Roshan Jamil が所有しているグジャラート語の文献（英訳 Khoja Diary）をフランス語に訳しながらの証言である。

32) Houssen 1979: 72-73

後もアリバイ・タワール Alibhay Tahwar の成功に促され、次々と19世紀後半にザンジバルで活躍していた他のコージャ商人もマダガスカルに商業の拠点を築いた。ナソール・ヌルマモード Nassor Nourmamode, タリア・トーパン Taria Topane³³⁾ などもアリバイ・タワール Alibhay Tahwar と同じようにヌシ・ベ Nosy-Bé やマジュンガ Majunga などを中心に商業の拠点を築いた³⁴⁾。

1865年のザンジバルからの商業目的の移動は、オマーン王サイドの覇権のもと、ザンジバルを中心とした東部アフリカ沿岸経済圏のなかにマダガスカル北西部が組み込まれつつある時代として象徴されるのではないだろうか。また、このような商業活動を理由としたザンジバルからの移動が、以後の本格的な移住の足がかりとなったのである。

III グジャラートからの移住の本格化——1880年代以降——

グジャラートからマダガスカル北西部海岸地域への移住が本格化したのは、1880年代になってからである。移住を促進させた要因の一つは、グジャラートでの地震や度重なる飢饉と疫病の流行などであった。以下、アスガール・バルダイ氏 Asgar Barday も証言している。

1880年曾祖父がグジャラートのポルバンダル Porbandar からチュレアル Tuléar 北部のアンブヒベ Ambohibé に来た。グジャラートでは1870年から80年にかけて旱魃などで移住が盛んだった。曾祖父は農民ではなく商人だったがその移住の波にのって1880年にインドを脱出した。当時マダガスカルにはドイツ系貿易会社オズワルド OSWARD³⁵⁾ が進出しており、マジュンガ Majunga とアンブヒベ Ambohibé に支店あったが、彼はアンブヒベ Ambohibé で同社に雇用された。

表1が示しているように、1880年代から1900年代前半にかけてマダガスカルへの移住は盛んであった。1900年に移住したロッサナリー・モロウ Rossanaly Molou 氏も次のように述べている。

父のモロウ・ラムジェー Molou Ramjee は、グジャラートのハディアナ Hadiana で1887年に生まれた。ハディアナ Hadiana からマジュンガ Majunga へは、1900年の13歳の時に移住してきた。すぐにベルー Bélo に移った。その後、長男と次男がムルンダヴァ Morondava で貿易会社を設立した。会社の主要商品はインド直輸入の生活必需品であった。輸出商品はドイツ向けに黒檀や紫檀などだった。

33) タリア・トーパン Taria Topane の父タリア・タジアニ Topane Tajiani は、オマーン王が貿易業者に課した関税を徴収する請負商人のヒンドゥー教徒のシヴジ・トーパン Sivji Topane と共同で数多くの船を所有していた大商人の一人であった (Bhacker 1992: 72)。

34) Delval 1967: 21.

35) ドイツ系企業のオズワルドは1840年代後半にザンジバルに商売の拠点を築き、その後マダガスカル北西部海岸にも同じように支店を開設していた (Kellenbentz 1983: 311-318)。

表1 マダガスカル北西部地方の在住インド系移民の人数

年	地 方							合計
	ヘルビル Hellville	アンティララナ Antsiranana	アンバンジャ Ambanja	アンビルブ Ambilobe	ヴヘマール Vohémar	アントラハ Antalaha	サンバヴァ Sambava	
1899	46	14			25			85
1902	56	21			31			108
1905	124	49			58	7	5	243
1913	277	163	37	33	51	12		573
1926	113	156	27	12	13	23	15	359

(出所) Guide Annuaire de Madagascar 各年次より作成。

多くのコージャは19世紀後半から20世紀にかけ移住し、その上で“商館（倉庫）でのカウンター業務係”として貿易会社を次々と立ち上げた。以下に続けてアスガール・バルダイ氏 Asgar Barday³⁶⁾ も述べているように第一次世界大戦後にドイツ系貿易会社オズワルド OSWARD がマダガスカルから撤退した際、彼の曾祖父もまたチュレアール Tuléar で貿易業を始めている。

曾祖父は息子ジナ・ジュヴァ Jina Jewa をインドから呼びよせ、貿易業を始めた。インドのポルバンダル Porbandar からは食糧品（穀物など）を送り、チュレアール Tuléar からは木材（紫檀やマングローブなど）を送った。この交易船には乗組員 marin 以外にもマダガスカルで商売を始めようとする者も乗船した。当時はビザやパスポートも必要なく自由に移動できたから。

以上の各証言より、19世紀後半、オマーン王サイドによる東部アフリカ沿岸経済圏の覇権は、ザンジバルや南アフリカ³⁷⁾ にとどまらず、マダガスカルまで及んでいたと推測できる。

IV グジャラートとの関係の変化——存在の特殊性——

以上のような19世紀後半からのコージャの移住の波は、1896年のフランスによるマダガスカル植民地支配確立から約30年後の1920年代まで続いた。アシック・アリマモード氏 Ashik Ali-mamod の証言は以下の通りである。

1895年、祖父プレムジェー Premdjeé はラナヴァヴ Ranavav からボンベイ Bombay に家族とやってきた。その理由はカーストによる差別とグジャラートの飢餓から逃れ、イスマ

36) 1931年生まれ。食品から靴の製造までを手掛けるマダガスカルを代表する大企業 la Société BAR-DAY の会長。

37) 大石によると（大石 2003）、この時期南アフリカにおいても同様に商業目的で移住してくるコージャやボーラなどのインドムスリムが増加しており、東アフリカだけにとどまらず、イギリス臣民としてインド洋一帯での活躍が見受けられた。

イール派に改宗するためだった。当時アーガー・ハーン Aga-Khan は信者獲得のためボンベイ Bombay で貧しい人々に施しをしていたからである。父アリマモード・プレムジェー Alimamode Premdjee は1900年ボンベイ Bombay で生まれ、1920年にマダガスカルセント・オーギュスタン St. Augustin へ移住した。父は後に十二イマームシーア派に改宗した。

フランスによる植民地支配が確立した1896年以降も、コージャのマダガスカルへの移住は続いていた。遅くとも1920年までは、マダガスカルとグジャラートを直接繋ぐ航路が開かれており、人の往来を含め深い関係が築かれていた。しかし、マダガスカルにおいても他の東アフリカ諸地域と同様にナショナリズムの台頭と独立による国民国家形成の動きなどが、コージャによって築かれていた商業ネットワークに打撃を与えた。具体的には第二次世界大戦、インドシナ戦争や1947年のフランス支配への武装蜂起とインド・パキスタン分離独立や1950年から1960年にかけての植民地政府による厳格な移民規制や独立³⁸⁾、社会主義経済への転換³⁹⁾などが、要因となってコージャによって築かれていたマダガスカルーグジャラート間の直接的な交易関係が途絶えることになった。それに伴い、コージャのグジャラートへの意識にも変化をもたらした⁴⁰⁾。20歳の大学生は以下のように証言した。

2000年頃、祖先を探すための代表団が組織され、グジャラートに派遣された。グジャラートで私の遠縁も見つかったが、現在では連絡を取り合っていない。自分自身のアイデンティティはコージャだと思っている。インド人としての自覚はもはやない。国籍もマダガスカルだし、グジャラートに対するノスタルジーも全くない。

さらに故郷を失ったコージャは、マダガスカルにおけるコージャという“民族”の自画像を十二イマームシーア派という宗教的根拠から、獲得することになった。フセイン・アリー Houssein Ali 氏も自らのアイデンティティについて以下のように語ってくれた。

小さい頃から“マダガスカル人”として育ってきた。祖先の歴史については興味もなかったし、両親に尋ねたこともなかった。私はマダガスカル市民で“マダガスカル人”だ。それと同時に私のアイデンティティは十二イマームシーア派にある。十二イマーム派に対する信仰が何よりも大事だ。

38) Blanchy 1995: 174-175.

39) 1935年チュレアルに生まれ、貿易会社を営んでいたアシク・アリマモード Ashik Alimamod 氏によると1975年のラティラカ Ratsiraka の大統領就任で始まった社会主義政策への転換でコージャは貿易業者としての免許を取り上げられ、貿易業に直接関わるのが不可能になったという。

40) 20世紀中葉までにコージャやボーラなどによる環インド洋世界での商業ネットワークもまた、移住先のホスト社会のナショナリズムなどの勃興により大きく変化した。近代以前の環インド洋世界諸地域が近代世界システムへと編成されるなかで、ナショナリズムの台頭と国民国家の形成を経験し、それ以前の商業ネットワークが分断され、新たな局面を迎えつつあり、かつて環インド洋交易の主役であったコージャやボーラといったインドムスリムの商業活動は大きく変化した。この点に関する詳細は(大石2003)を参照のこと。

さらにモーミン師 Sheikh Momin も次のように証言した。

コージャとは“民族”である。われわれは十二イマームシーア派のコージャであり、“マダガスカル人”として生きるコージャという“民族”である。

ホーム社会との関係が切れたコージャは、“帰るべき場所がない移民”として特殊な“マダガスカル人”になっていく。コージャは、社会的には人口5,500人程度の少数移民というカテゴリーに数えられるが、経済的には活発な商業活動⁴¹⁾によって、マダガスカル経済にとって無視できない存在に成長した。マダガスカルにおいて社会的にはマイノリティーであるコージャが、経済的には大きな影響を与えている。現在彼／彼女らは、社会的立場と経済的立場との大きな落差を抱えながら存在している。このような落差を埋め合わせようとするかのように自らのアイデンティティを十二イマームシーア派に求め、宗教的な結びつきを強めつつある。現在ではいわゆる“マダガスカル人”への布教活動も活発に行っており、十二イマームシーア派の信者の数は確実に増加している⁴²⁾。

V むすびにかえて——永遠の被害者 Victime Eternelle——

1987年3月のある“金曜日”の朝、マダガスカルのいくつかの主要都市でコージャの商店を襲撃する事件が起きた。事件の背景には、社会主義経済の行詰りが明るみになり始め、貧困から来る社会不安の増大があった。しかし表向きは主食である米をコージャが投機目的で隠しているとされ、多くのコージャの商店が“マダガスカル人”に襲撃された⁴³⁾。そのような事実があったかどうかは、今となっては確かめようもない。しかし発展途上国の一つであるマダガスカルで少数派のコージャに経済的な利益が集中しているという現象⁴⁴⁾が、多くの“マダガスカル人”に嫉妬を惹起させたことは事実だろう。

さらにこの事件の裏には貧困から来る民衆の不満をコージャの存在の特殊性に向けることで、解消させようとした政府側の意図が見え隠れする。これに対してコージャは、ホスト社会であるマダガスカルと良好な関係を構築するために貧しい人々へ食料などの施し、刑務所への食料の寄

41) コージャの商業活動についての考え方をマドラサ校長のモハメッド・ラーザ Mohamed Raza 氏は以下のように表現してくれた。「コージャは政治的なことに対する関心はない。商売への関心がコージャにとって全てである。コージャは商人だから。左の頬を相手に殴らせながら右手でお金を数える。それが商人としてのコージャのメンタリティーだ」。

42) ロッシュャン・ジャミール氏 Roshan Jamil によると“マダガスカル人”の十二イマームシーア派は約1万人になったという。また筆者が2004年当時マダガスカルに在住していた時と比べ、首都でシーア派のイスラム教徒を見かけることが多くなった。

43) 2004年末、筆者がマダガスカル滞在中も米価が上昇したことがあり、その時もコージャが米を隠したと噂されていた。

44) この点についてブランシー (Blanchy 1995: 323-325) は、以下のように比喩的述べている。少数のインド系、とくにコージャに富が集中し、多数のいわゆる“マダガスカル人”との間の経済格差という現象問題が少数の北に富が集中している南北問題と同じように非常に危うい構造である、と。

付、診療所設置や井戸掘削などの社会奉仕活動を積極的に推進している。しかし、このような活動がマダガスカルで大々的に報じられることはない。ロッシュナリー・ヴァリー氏 Roshanally Vally はコージャ側の広報活動の消極性を指摘しながらも、次のように苦しい胸のうちを語ってくれた。

父も私も妻も子どもも孫もマダガスカルで生まれた。私は“マダガスカル人”だ。インドではもはや外国人でしかない。わたしたちの故郷はマダガスカルだ。しかしマダガスカルにおけるコージャは、“永遠の犠牲者 Victime Eternelle”なのだ。

1865年ザンジバルからのコージャは、マダガスカルに“商館（倉庫）での会計係 Comptoir”として貿易拠点を築くために、すなわち商業拠点を築くために移動してきた。やがて、1865年から活発化した商業を目的とした移動が、1880年代になるとグジャラートからの直接移住を呼び込む結果となった。大石⁴⁵⁾も述べているように、ムスリムであるコージャなどによる商業活動が現地のアフリカ系、さらにイギリス人などのヨーロッパ人のなかに拡大し、彼／彼女らを顧客にすることで、またたく間に地域経済のなかで必要不可欠な分子となった。マダガスカルにおいても同様な現象が見られ、フランスの植民地支配が確立した1896年以後も移住の波はしばらく続いた。しかしやがてアフリカでナショナリズムの台頭と国民国家の形成などがグジャラート—マダガスカル間で活躍していたコージャの商業ネットワークに大きな打撃を与えた。それに伴い、コージャは、ホーム社会であるグジャラートとの関係を失った。結果、故郷を失い“帰るべき場所がない移民”となったコージャは、“マダガスカル人”としての表象の獲得を目指しながらも、経済的には目立った存在であるがゆえに、特殊なマイノリティーになった。

【参 考 文 献】

- エスアベルマンドルウス、深澤秀夫訳 [1992] 「12世紀から16世紀のマダガスカルと近隣の島々」『ユネスコ・アフリカの歴史』第4巻（下）、pp. 865-891。
- 大石高志 [1999] 『南アジア系移民——年表および時期区分——』文部省科学研究費・特定領域研究（A）「南アジア世界の構造変動とネットワーク」Discussion Paper No. 4。
- [2001] 「南アフリカにおける経済自由化とマイノリティ・ビジネス——インド・ムスリム系衣料製造販売業者の事例を中心に——」南埜猛、関口真理子、澤宗則編『越境する南アジア系移民——ホスト社会とのかかわり——』文部省科学研究費・特定領域研究（A）「南アジア世界の構造変動とネットワーク」pp. 43-58。
- [2003] 「南アフリカのインド系移民——商人・移民のネットワークと植民地体制との交差と相違——」秋田茂、水島司編『現代南アジア⑥ 世界システムとネットワーク』東京大学出版会、pp. 299-325。
- 古賀正則・内藤政雄・浜口恒夫 [2000] 『移民から市民へ——世界のインド系コミュニティ——』東京大学出版会。
- 後藤 伸 [2005] 「15世紀末のインド洋における交易関係」神奈川大学『国際経営論集』第29巻、pp.

45) 大石2001：114。

51-69。

坂井信三 [2003] 『イスラームと商業ネットワークの歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク——』世界思想社。

篠田 隆 [1994] 「インド・グジャラートの宗派・カースト構成——1931年国勢調査の分析——」『大東文化大学紀要 (社会科学)』第32巻, pp. 201-232。

関根康正 [1997] 「『不可触民』はどこへ行ったか?——南アジア人類学における『植民地主義と文化』という問題」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化——人類学のパースペクティブ』新曜社, pp. 307-347。

タバータバーイー, 森本一夫訳 [2007] 『シーア派の自画像——歴史・思想・教義』慶応大学出版会。

富永智津子 [1987] 「旅と商人と——インド洋世界から」『歴史評論』歴史科学協議会編集, 校倉書房, pp. 38-49。

—— [1996] 「インド洋海域における東部アフリカ沿岸地域——19世紀スワヒリ世界の展開——」歴史学研究会『歴史学研究』No. 691, 青木書店11月号, pp. 38-50。

中村廣治郎 [1998] 『イスラム教入門』岩波書店。

ベアソン, 生田滋訳 [1984] 『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』岩波書店。

森山 工 [2006] 「〈民族〉と〈国民〉の語り——現代マダガスカルにおける植民地統治の遺制——」『自然と文化そしてことば No. 2 インド洋の十字路マダガスカル』pp. 6-20, 言叢社。

家島彦一 [1992] 「インド洋海域の交易都市ネットワーク」『学術月報』第45巻第1号, pp. 40-47。

Allen, Calvin H. Jr. [1981] "The Indian Merchant Community of Masqat," *Bulletin of the School of Oriental and African studies*, University of London, pp. 39-53.

Beachey, R. W. [1996] *A History of East Africa, 1592-1902*, London.

Bhacker, M. Reda [1992] *Trade and Empire in Muscat and Zanzibar: Roots of British Domination*, Routledge, London and New York.

Blanchy, Sophie [1995] *Karana et Banians—Les communautés commerçantes d'origine indienne à Madagascar*, L'Harmattan.

Champbell, Gwyn [2005] *An Economic History of Imperial Madagascar, 1750-1895*, Cambridge University Press.

Delval, Raymond [1967] "Les Musulmans à Madagascar," *Revue de Madagascar*, N° 37, pp. 5-32.

Hollister, J. Norman [1953] *The Si'a of India*, London.

Houssen, Dilavard [1979] "Note sur Communauté des Khoja Shites de Tananarive," *Archipe* 17, n° 17, pp. 71-79.

Jaffer, Hassan Ali [1999] "Case For Survival: Challenge Facing the Community in North America," *A Discussion Paper Presented to NASIMCO and Other Community Workers and Educators*, Mombasa, 30th. January.

Kellenbenz, Hermann [1983] "Zanzibar et Madagascar dans le Commerce Allemand (1840-1880)," *Omalysy Anio*, Université de Madagascar, pp. 311-318.

Keswani, D. G. [1980] "Influences culturelles et commerciales indiennes dans l'océan Indien, de l'Afrique et Madagascar a l'Asie du Sud-Est, Relations historiques à travers l'Océan Indien", *Histoire Générale de l'Afrique, Etudes et Document* 3, Unesco, pp. 37-51.

Nagashima, Hiromu, [1988] Merchants and Rulers in Gujarat During the 17th Century: Didn't the Merchants of Surat City want to be protected by the rulers?, H. I. H. Prince Takahito Mikasa (ed.) *Cultural and Economic Relations Between East and West: Sea Routes*, Bulletin of Middle Eastern

- Culture Centre in Japan, Vol. 2, pp. 89-96.
- Nicholls, C. S. [1971] *The Swahili Coast: Politics, Diplomacy and Trade on the East African Littoral 1798-1856*, Africana Publishing Corporation, New York.
- Pearson, M. N. [1998] Indians in East Africa: The Early Modern Period, in Mukherjee and Subramanian (eds.) *Politics and Trade in the Indian Ocean World: Essays in Honour of Ashin Das Gupta*, pp. 227-249.
- Razafimandimamby, Noro [1999] "Communauté Indienne: 0. 2% de la Population 15% du PIB," *Révue de l'Océan Indien*, juin, pp. 25-33.
- Rizvi, S. S. Akhtar and King, Noël Q. [1973] "Some East African Ithana-Asheri Jamaats (1840-1967)," *Journal of Religion in Africa*, Vol. 5 Fascicule 1, pp. 12-22.
- Sheriff, Abdul (ed.) [1995] *The History and Conservation of Zanzibar Stone Town*, Ohio University Press, Zanzibar.
- Toussaint, Auguste [1961] *Histoire de l'Océan Indien*, Presse Universitaires de France.

* とくにことわりがない場合、コージャ Khoja は十二イマームシーア派コージャ Khoja Shia Ithana-Asheri のことを指している。

表記に関する原則

- ① マダガスカル語はローマ字標記だが, "o" の発音はフランス語の "e" と同じように発音される。したがって本稿でもマダガスカル語の発音通りのカタカナ標記にする。
例) アンタナナリヴ Antananarivo, ベルー Bélo など。
- ② インド人の人名に関しては, 頂いた名刺の表記に従う。カタカナ表記に関しては, 出来るだけ彼/彼女らの発音に近いものとした。証言に登場する人物名に関しては, 証言者の発音に従いフランス語表記にし, カタカナ表記は発音に近い形で表記した。
例) モーミン Momin, モロウ Molou, ジナ・ジュヴァ Jina Jewa など。
- ③ アラビア語のカタカナ表記に関しては, 原則的に岩波書店版『イスラーム辞典』(2002年)に従った。

(受付 2007年12月14日)